

精密な訳文を作成するために

—『Clues to Reading 英文和訳の徹底演習』発行にあたって

竹岡 広信

1. 『Clues to Reading』の執筆動機

英文解釈をする上で必要なものは、

- ① 構造を正確に把握すること
- ② 正確な単語の知識をもっていること
- ③ 筆者の「言いたいこと」を把握すること

の3つである、と言えるでしょう。

筆者の「言いたいこと」がおおよそわかっている生徒でも、訳させると必要な事項が多く欠けている答案を書くことが珍しくありません。そうした原因の多くは、その生徒が「雰囲気の英文解釈」の域を出ていないことにあります。こういう生徒は「言いたいわかる」というレベルを越えることができずに、「読解力」はもっているが点数に結びつかないということになってしまっています。このタイプの生徒は、自分の作った好き放題の答案を「意訳」と称して正当化する傾向があります。

一方、構文的理解や単語の力はある程度あるのに、筆者の「言いたいこと」を考えずに訳を書いてしまっているため、訳文を読んでも意味が通じない答案を書く生徒も多くいます。このタイプの生徒は、自分の作った意味不明な答案を「直訳」と称して正当化する傾向があります。

前者のようなタイプの生徒の学力を伸ばさせるためには、文構造の正確な把握を確認させることが不可欠となります。本書では、「差がつく英文解釈上のポイント」を45に絞り込みました。英文解釈に必要な大きな枠組みは、全部で100ぐらいだと思いますが、その中から中級・上級レベルの生徒が間違えやすいものを45に厳選しました。

また、後者の「構造はわかるがうまく訳ができない」というタイプの生徒のためには、ただ構造がわかれば訳せる、という問題演習だけでは不十分です。よって、たとえポイントとなる文構造がわかっても、あと一步頭をひねって内容を考えないと理解できない英文を選ぶようにしました。その結果、パターン

認識だけでは培えない力を伸ばせるような問題集になったと自負しています。中級レベルの生徒が上級レベルへと移行するためには、「思考力」の強化が不可欠です。こればかりは、いくら授業を聞いたところで伸びません。良質な問題を自分1人で試行錯誤を重ねて解くことによって身につくものであると思います。よって、この問題集を使って頂ける場合には、生徒に十分な時間をかけて予習してくるようご指導頂きたいと願っています。

2. 『Clues to Reading』の特徴

(1) 「差が出るポイント」を45に精選

近年、国公立大学の入試問題で出題される下線部和訳問題は、従来の「構文」だけに依存したものでなくなりつつあります。あくまでも、文全体を捉えさせた上で、下線部分の内容理解力を計ろうとする傾向が強まっています。とはいえ、入試で頻出の構文に大きな変化が見られるわけではありません。よって、構造把握力を見るための力を軽視するわけにはいかないのです。

本書は、過去10年間に出版された国公立大学の入試問題を徹底分析し、下線部和訳する上で不可欠となるポイントを選び出し、その中から特に「差がつくもの」を45に精選しました。「差がつく」と考えた基準は、膨大な生徒の答案を採点する中で得られた「印象」です。授業とは、つきつめれば「生徒1人に対して教師1人」が理想的な状態です。物理的にそれは不可能だとしても、採点することによって、その状態に近いものが得られるのではないかと考えています。コンピュータ分析がどんなに有効な手段であっても、生徒の答案を実際に採点することにはかなわないでしょう。単語レベルではsomeを「いくつか」と訳すミス、一般論のyouを「あなた」と訳すミス、構文レベルでは、接続詞のthatがわかっている生徒でも〈SV that 副詞句

[節]S'V)のように that 節のあとに副詞句[節]が挿入されると構造がわからなくなってしまうといったことは、採点を通してわかるものだと思っています。

よって、30年近くも生徒の答案を採点し、それによって積み重なった「印象」から選び出された45のポイントは、現場の先生にも共感してもらえらるものと自負しています。

(2) 実際の生徒の答案をもとにして解説を執筆

本書で採用した英文は、すべてテスト演習の形式にして、高校2年、3年生にやらせてみました。そしてその答案を採点・分析し、その印象が薄れてしまう前に、解説を書き上げました。「生徒の実際の答案からかけ離れた解説など、訳に立たない」という強い思いからそのようにしました。ですから、解説の中で「誤訳例」として示したものは、実際の生徒の答案に数多く見られたものです。このように実際に今の生徒の答案を採点することで、実態と乖離することのない解説に仕上がったと思います。

差がほとんどつかなかった箇所解説は少なめにし、差のついたところ、できの悪かったところは解説を詳しくしました。特に別解が出てくる箇所に関しては、複数の生徒の答案例も載せました。これによって、生徒の目線に立った解説になったと思います。

「模範解答や解説を見ても、自分の答えが正しいのか間違っているのかがよくわからない」という声をよく聞きます。これは、「模範解答」や「解説」が生徒の実態をあまり考慮していない紋切り型のものであるからです。「うまい授業」とは、生徒の間違えるポイントを的確に指摘して、それを重点的に教える授業である、と思います。よって「うまい解説」とは、言葉を弄して丁寧に書いたものではなく、生徒の目線に立った解説でしょう。

もちろん、長年教師をやっていると、「おおよそ生徒が間違えるところ」は把握できてくるものです。ところが、長年の教職経験をもつベテラン教師でも、「生徒の間違うポイント」がすべての的確にわかるわけではありません。なぜなら、生徒が中学校時代に受けてきた教育内容の変化などにより、これくらいのことは知っているだろうという「常識」が変化するからです。

たとえば、We have no evidence at all that

this is the case. 「これが正しいという証拠を我々は何ひとつ有していない」という文を高校1年生にテストしてみました。evidence と that 以下が同格の関係であることがわかっていない生徒が多いだろう、と思いながら採点を始めると、驚いたことに、no ... at all 「まったく…ない」がわかっていない答案が続出しました。同格関係は把握しているのに、「すべての証拠」と訳しているものが出てくる、出てくる！ not at all というイディオムは中学で習う基本事項のはずなのですが、not が no に変わるだけで「難問」になってしまうのです。これは、採点してみればじめてわかったことでした。もし採点をせずに授業をしていれば、生徒の要求する解説からかけ離れたものになっていたかもしれません。

(3) 授業しやすい70語～130語の中文を採用

英文解釈は、本来ならば、複数のパラグラフからなる「長文」を読ませ、全体像を捉えさせた上で下線部を和訳させる、というのが理想だと思います。ただこれでは、ポイントとなる箇所以外の説明にどうしても時間を費やしてしまい、限られた授業時間の中では多くを扱うことは難しいと思われまます。よって、1つのパラグラフではあるが、ある程度内容にまとまりのあるものを精選し、ポイントとなるところを鮮明にすることによって、短時間で最大の効果があげられるように配慮しました。

(4) 思考を鍛えるための英文を採用

中級レベルの力を持つ生徒を上級レベルに引き上げるには、「思考訓練」を積ませることが不可欠となります。そのためには、ある一定水準以上の難度のある英文を読ませて、「結局、これは何を言いたいのか？」ということを考えさせることが必要となります。パターン訓練を繰り返すだけでは、思考回路は鍛えられません。以上のことを考慮して、採用した英文は、ある程度しっかり読まないとい何が言いたいのかがわかりづらいものを選びました。生徒1人1人が英文とじっくりと向き合い、思考訓練をしてくれることを願っています。

(駿台予備学校講師・洛南高等学校講師・竹岡塾主宰)